

大通公園を望む窓辺から

パンデミック宣言が出された

常任理事 藤井 美穂

北海道医師会館の一角の窓は床からのガラス張りで、四季折々の大通公園の景色が目に入ってくる。今年は雪不足で例年より小振りの雪像が並んだ雪まつり会場の大通公園は、開催直前に大雪に見舞われ真っ白。おまけに減ったといわれる中国からの観光客も相変わらず、賑やかに話しながら楽しんでいる。

人類は古来、感染症との闘いを続けてきた。ペスト、天然痘、結核、コレラ、インフルエンザ、SARS、そして新型コロナウイルス感染。1月に武漢のエピデミック感染として広がり、2月には大型クルーズ船の乗客のみならず、とうとう雪まつり会場での感染者接触から北海道を皮切りに全国にあっという間に拡散した。3月11日にやっとWHOがCOVID-19のパンデミック宣言をしたが、この時すでにイタリアでは感染者が1万人を超え、スペイン、ドイツ、フランスなどの欧州や、米国、イランでも急速に患者数は増加していた。

古来複数回のパンデミックの記録があるペストは、14世紀の世界規模の大流行で約1億人が死亡したといわれている。SARS同様、中世に起こったペストも中国大陸で発生し中国の人口を半分に減少させるほどの猛威だったという。ヨーロッパに運ばれた毛皮についたノミが媒介し、中央アジアからイタリアに上陸したペストでイタリア北部の住民が全滅したという。おもしろいことにポーランドでは蒸留酒で食器や家具を消毒したり腋や足などを消臭する習慣が広く定着していたこともあり、ペストの発生が抑制されていたという。

パンデミック後には労働人口が少なくなり農業から牧畜に変わるなどの変化の一方、文化や医療の著明な進歩があった。会議や学会が中止になり、ぼっかり空いた時間での原稿書きの傍ら耳に入る株価暴落のニュースから、世界経済恐慌の不安がザワザワ押し寄せ始めてきた。

膵がん早期診断プロジェクト

理事 稲葉 秀一

帯広市医師会では、この地域の膵臓がんの死亡率が全国平均を大きく上回っている(SMR125.6、特に帯広市の男性は141.5)ことを重く受け止め、帯広・十勝の膵臓がんによる死亡者を減らす目的で、2018年1月に膵がん早期診断プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、膵臓がんになりやすいハイリスクの患者さんや、画像検査・血液検査で膵臓がんの可能性が疑われる患者さんを抽出し、「地域連携パス」を用いて“かかりつけ医”と“連携病院”が協力して、定期的な画像検査を行うことにより膵臓がんの早期診断へつなげる活動となっております。

具体的には、ハイリスクに当てはまる患者さんの“かかりつけ医(内科医に限らずあらゆる診療科の先生)”は、膵臓の詳しい検査ができる“連携病院(管内6病院)”に対して、このプロジェクト専用の各病院共通紹介状(地域連携パス)を用いて紹介し、血液検査と複数の画像検査を組み合わせさせて精密検査をしていただきます。連携病院ではハイリスク患者として登録し、手術可能な小さな膵臓がんをいかに早期に見つけるか、定期的に血液・画像検査していくこととなります。

このプロジェクトの成否のカギは、“かかりつけ医”と“連携病院”との病診連携、地域住民へ膵臓がんについての啓蒙活動、そして腹部超音波検査に対する手技と知識の底上げにあります。十勝放射線技師会、十勝臨床衛生検査技師会にもこのプロジェクトの中心メンバーとして入っていたが、3団体協働で膵臓抽出に関わる精度向上を目的とした「腹部超音波レクチャー&ハンズオンセミナー」を定期的に開催(これまで4回)しております。

2019年3月までの集計ですが、全症例681例中膵臓がんは38例で、その内手術例は38例でした。会員、関係団体と協力してこのプロジェクトを推進してまいります。

